

55周年記念誌

中大理工ボート部

窓



55周年にあたり

中大理工ポーター部
OB監督

中島 弘高

中大理工ポーター部
コーチ

桑原 風人



中 大理工ポーター部OB・OG会の皆様、一緒に時間を共にしてくれた学生諸君、周りで支えてくださった関係者の皆様には、心より御礼を申し上げます。私が監督に就任したのは、1996年に卒業してから2年目のことでした。部員の急減によるものですが、古きを知る自分なら何かができるはずと思い、安易な考えで監督に立候補しました。しかし実際には思う様に行かず、マネジメント不足で何人もの現役生を困らせてしまう場面も多々ありました。各種改善の甲斐もあり、ここ数年は現役人数も増え、OB会バックアップ体制も強化され、体系的に活動できるようになりました。

私、理工ポーター部監督としては学生に対し、ポーターという競技の好成績だけを追い求めるとは伝えていません。仲間という存在を尊重し、練習を通して友情関係を育み、思いあつて社会に出てからの自信を形成してもらいたいという思いがあります。

現在、時代は変わりましたが学生たちは自ら行動し継続的に活動しております。そして、一緒に課題や未来を語らってくれることは私にとっても大変な財産となっております。引き続き、成長する理工ポーター部をどうぞよろしく願っています。

55

周年式典の開催並びに記念誌の発行にあたり、ご尽力して下さいました方々に感謝申し上げます。

現在、中央大学理工ポーター部の乗艇練習は平均20人ほどで行っており、50周年式典の寄付金で購入したダブルスカル「駿河」、中央大学杉並高校ポーター部さんからお借りしている「URANUS」「TRITON」等を使わせて頂き、この規模での乗艇練習ができております。所有するオール数はスカルオールが3セットから16セット、スィープオールが4セットから12セットと、5年間で格段に増えました。大半は、寄付金で購入したものと仙台大学ポーター部さんから頂いたものです。多くの方のご支援があつて今の活動ができていくことを、現役部員は肝に銘じてはなりません。

人数が増えた今は、5年前と異なる活動の難しさを感じます。上級生は後輩との接し方に頭を悩ませながら、部のルールを考えチームを成長させてくれました。ポーターのスキルアップや乗艇における安全管理など、未熟な要素はまだまだまだありますが、中島監督が掲げる「和をもって前進す」を体現できるよう、現役部員と接しながら、チームの成長に一役果たしていく所存です。

中大理工ポーター部
OB会長

内藤 堅一



理 エポーター部の創立1963年（昭和38年）から、55年という節目の年を迎えた。1963年昭和38年というのは、前の東京オリンピックの前年である。次の東京オリンピックは2020年であるが、1964年の東京オリンピックの頃が中央大学漕艇部の全盛時代であつたと私は思う。オリンピックにエイトに1人、付きフオアに2人で合計3人が漕手として参加している。当時の監督の北川先生もコーチとして参加されている。この時代に理工ポーター部は誕生した。この誕生を後押ししていただいたのが、故北川喜一郎監督である。正科体育でポーターを選択した理工工学部の有志（後の理工ポーター部1期生）にナックル6を漕ぐことを許可していただいたのが、始まりである。1年間の練習、最初の相模湖レガッタ出場の後、中央大学漕艇部の納会で理工ポーター部を紹介し、中央大学漕艇部のOB並びに現役に理工ポーター部を認知して貰えるように取り計らっていただいたのも北川監督である。翌年春には中央大学漕艇部と理工ポーター部の合同合宿が戸田で行われた。厳しい陸トレで鍛え直され、乗艇練習のメニューも中央大学漕艇部のコーチから指示された。オリンピック出場選手とひ弱な理工学部生と一緒に練習した最初で最後の合宿であつた理工ポーター部を誕生させていただいた北川監督を始め当時の中大漕艇部関係者にまず感謝申し上げます。

中央大学
白門艇友会会長

渡邊 孝憲



創 部55周年を迎えられた中央大学理工ポーター部ならびに同部OB・OG会皆様の、旺盛なる活動意欲と実行力に心から敬意を表しお慶び申し上げます。一口に55周年と申しますが大学はもとよりご関係者皆様の心強いご支援と、絶えざるイノベーションの下、ひたすらにポーターに取り組まれた真摯な姿勢があつたればこそ成果と、改めて敬意を表し、お慶び申し上げます。

昭和38（39）年当時、大学正課体育でポーターの面白さを知った皆様の先輩が同好の士を募り、相集い、理工ポーター部の草創と言う困難な時期を切り開いた様に伺っています。その成果は、創部後10年に満たぬ昭和47年度の全日本選手権大会・男子舵手つきペアで、日本一と言う覇者の座に早くも結実されました。草創から守成へと変遷する今日、理工ポーター部の歴史にも数々のドラマが存在することと推察します。55周年を迎えるにあたり改めてその一つ一つに光を照らし、自らの歴史を知ることがこれからの理工ポーター部を考えるうえで誠に時宜を得た、格好の機会とご同慶の至りに堪えません。ご盛会と理工ポーター部ならびに同部OB・OG会の益々のご発展を心から祈念申し上げます。

この頃に各大学の理工工学部にポーターが相前後して生まれている。これが後の関東理工系レガッタに発展していく。早大理工とは草創期から縁が深い。1期吉田先輩の「理漕人」1号の投稿には早大理工の高校時代の友人から声をかけられて中大に理工ポーター部を作ったとある。大学により、漕艇部と理工ポーター部の関係はいろいろあつたが、中央大学理工ポーター部は中央大学漕艇部と前述のように良好な関係でスタートが切れたのは幸いであつた。

私は7年目ぐらいまでは練習にも顔を出し、現役の学生の顔と名前も一致したが、正式なOB会活動もなく、理工ポーター部とは疎遠になっていった。OB会の体をなすようにしてくれたのは6期の北島正君の年代である。1981年（昭和56年）に会報「理漕人」を発行し、3年ほど続いている。その後部員が集まらず、廃部の危機に瀕した時代もあつたと聞くが、私は全く関与できていなかった。私が再び理工ポーター部に関与するようになったのは、2013年（平成25年）の50周年の式典である。OB有志がこれを機会に理工ポーター部OB会を再建しようと会則を作り、50周年の式典を大々的に開催してくれた。当時は5期の樋口統君が会長をしていた。ここで新理事と会長が指名され、時計の針が逆戻りして2期の私が会長に就くことになった。シヨトリリフのつもりで会長を引き受けたが、55周年までつれてしまった。OB会の幹事には若手も参加してくれるようになり、現役とも、良好な関係を築きつつある。関東理工系レガッタのOBエイトに出漕するようになり、まだ勝つてはいないがOBにも現役にも良い刺激になっていると思う。中大理工ポーター部並びにOB会が発展する様体制を整え、良い形で会長職を引き継ぎたい。現役部員も増えており、特に女子部員が増えたので更に良い結果が期待できると思う。次の100周年を目指して現役もOBも頑張つて欲しい。

中央大学杉並高校
ポーター部顧問

山田 篤史



中 中央大学理工ポーター部の創設55周年、誠にありがとうございます。私は現在、中央大学杉並高校ポーター部の顧問をしており、理工ポーター部との関わりは13年前の2005年にさかのぼります。

1965年創部の杉並高校漕艇部は1989年に一度廃部となりましたが、私が杉並高校に赴任した翌年の2005年に新制ポーター部として復活しました。同じ頃の理工ポーター部は毎年部員が数名しか集まらず、活動が難しくなっている状況でした。そこで、中島監督から杉並高校ポーター部復活の経験を買っていただき、ポーター部再建のために力を貸してほしいとご相談をいただきました。その後、杉並高校ポーター部卒業生が何人か理工ポーター部に入部、試乗会や合宿の合同開催を経て、現在に繋がる協力体制が築かれました。

ポーター競技の特性は、協調・協力して同じ目的のために全力を尽くすことだと思えます。それはクラブ運営の面でも発揮できる力だと思っています。同じ中央大学のクラブとして、また、同じポーター人として、これからも両部で交流し支えあい、互いにますます発展していけることを期待しております。今後も引き続きご協力の程、宜しく願います。

中大理工ポーター部
部長

小林 一哉



電 子情報通信工学科の小林と申します。この度は中大理工ポーター部創部55周年、誠にありがとうございます。私は、2011年より理工ポーター部長を務めさせて頂いております。故稲葉教授の後を受け、当研究室に卒業研究で配属された丸山君より顧問部長の推薦があり、お受け致しました。

当時より部員不足でポーター部が危機に瀕していることを伺っておりましたが、OB会の層が厚く歴史ある団体であるため、復活を祈っていました。その後、OB会幹事会の諸兄、監督・コーチの皆様のご尽力により、今や30人を超えるまでに。今後は、大変喜ばしい限りです。今後の活躍を大いに期待しています。

私の研究室では、電磁波の散乱・回折問題の理論的解析、コンピュータシミュレーションによる散乱・回折現象の可視化に関する研究を主として行っています。多くの学生も研究に携わり成果を上げております。ご興味があれば、春日校舎の1号館6階にいらして下さい。

理工ポーター部は学生あつてのポーター部です。学生が勉学とともにポーターにも励まれるよう、卒業生が下地を作る必要があります。理工ポーター部をこれからも宜しく願います。

中央大学杉並高校
ポーター部友会

江尻 裕一

遠藤 航



江 尻、理工ポーター部と関わりある？このままだと廃部になつてしまうかも

中大職員に就職してしばらくしたある日、当時学友会にいた同期の遠藤君から連絡がありました。聞けば活動実績が確認できないので理工連盟から外れる可能性があるとのこと。当時は中杉のアシスタントのような立場でしたが、何か少しでも手伝えばと、卒業生に理工ポーターへの参加を呼びかけました。当時はとにかく復活を優先したため、特別に文系OBも受け入れていただき、そのお陰でポーターは好きだが競技に身を捧げるには至らない中杉OBがポーターを続けることができました。

あの時遠藤君が連絡をくれたから、そして理工ポーター部が中杉OBを受け入れなかったら、今日の両部の関係は築けなかったと思います。人生100年時代と言われるのが、クラブチームも負けずに100周年を目指して、理工・中杉・中大ともに協力してポーター界を盛り上げたいと考えています。中杉スタッフとして、大学ポーター部OBとして、そして中大職員として理工ポーター部の益々の発展を祈念いたします。